

支那の青銅器時代に就いて (上)

梅 原 末 治

—

支那で古くから尊彝なる名稱を以て呼ばれてゐる青銅の容器類は、同國の上代に於ける最も特色ある遺物の一として、早く漢代から其の出土が世人の注意に上り、これを祥瑞と解し、轉じて愛玩から研究への端緒が開かれたことであり、宋代に至つては『考古圖』『博古圖錄』等のそれ等を主とした浩澁な圖録が刊行せられて、其の前者の記述のうちには既に發見地並に伴出物等をも記して、考古學上からする用意をさへ示してゐる。従つてこゝに取扱ふところの研究の對象たるや、由來に於いて頗る古いものがある譯である。^①さりながら其の以後支那での古銅器の考察は、器にある款識の釋讀を主とする方面に發展し、また是等が禮樂の器であると云ふ所から、古禮經に見える記事と對比して、用途の細部を致へることに傾き、古銅器の研究は金石學の一部として文字の學であると同時に、また經學の一部門としての發達の道程を辿つて、器自體から上代の文化を推すところの重要な方面は、自餘の考古學的研究と共に、近年まで殆んど閑却せられてゐたのであつた。處が十九世紀に於いて非常な發展

を遂げた歐洲に於ける考古學の研究が、西方文物の東漸につれて、顯著な此の東亞の古代遺物に對する海外人士の注意を促し、二十餘年來支那以外の人々に依つて、先づ其の美術工藝品としての觀察が行はれ、ついでそれから支那古代の文化狀態を攷へようとする新しい試みを見ることになつた。此の考察に向つて一の重要な機縁をなしたものは河南省彰德府の傳殷墟に於ける遺物の發見であるが、更にアンダーソン博士(J. G. Anderson)の支那史前遺跡の檢出に負ふて、一層其の風潮を盛んにしたことは、こゝに改めて説くまでもない著名な事實である。

さて支那では種々の事情から、今日なほ自由に遺跡の學術調査を行ふことが許されてゐない。従つてかゝる考古學上の觀察の基準となる確實な資料を闕くと云ふ憾は多いのであるが、上記河南省の殷墟の出土品には、明に金屬器で刻したとせなければならぬ龜版獸骨文があると共に、他方には石斧、石庖丁、石鏃等をも存して、羅振玉氏の本邦に齎した其の或物が先づ我が一部學者の注意を惹き、若し兩者が同一の層から出たものとすれば、殷代を以て考古學上の所謂石金過渡期に比定することの可能が認められるとなし、それから上記の特色ある銅器を青銅器時代の文化を表徴する遺物とする考をも導き、更にこれに文獻に見える秦の始皇が銷兵鐘鏃金人十二を鑄るとある記事を以て銅器時代の終末を物語るものとする解釋が加はつて、支那の青銅器時代の中核は周代にあり、上は殷代に遡り、下は周末に及ぶものとして、其の全貌を窺はうとする見解が表はれることになつた。而してアンダーソン

ン博士の手で史前の遺跡が検出せられた結果、新たにそれと石器時代との連系にも推測が及んで、是等を通じて古代の文化の動きなり、或はそれらの時代の特相をも認め得られる様な外觀を呈して來た。^②尤も殷墟は昭和三年以降數年に亙る李濟博士等の發掘調査の成績を見ると、種々の興味ある遺品が發見せられて、同遺跡に關する知見を擴め、學界の關心を高めたことではあるが、主要地帯に於ける厚さ三米突を超えた遺物包含層は、殆んど擾亂し去られてなほ劃然たる層序を示すものがなく、出土遺物の相互の關係、引いて其の年代の先後等を判定する確かな標準を得難い現状にある。これは發掘の結果種々の高い文化段階の所産の現はれたこと、共に、如上の殷代を以て石金併用期とする想定の実らしさを弱める様に思はれるのである。^③併し他方別に同地から出たと云ふ銅利器の二三が道野鶴松氏の手で分析せられて、其の成分が殆んど純銅であると云ふ事が分明了結果、石器から青銅器への推移の中間期間に屬する所謂純銅器時代 (cupper age) を如實に示現するものとする氏の提説となつて、^④殷墟の示す文化を以て石金併用期とする可能性が別個の見地から想定せられた觀があり、右の支那の青銅器時代に關する學説が漸次確かさを加へつゝある様にも見える。^⑤

私は前年の歐米遊學中自らの好む所から、石器時代より青銅器使用の時代を経て鐵器時代の初期に至る近東並に歐洲の史前考古學に特別の興味を持つたことであつたが、また其の終りの一ケ年の間、機會に惠まれて歐米に流出した多數の支那古銅器類を觀察するの幸を得て、自ら支那の青銅器時代の

問題にも觸れる様になつた。當時私は彼地の整然たる考古學上の調査の齎した輝かしい研究の成果を、支那に於ける資料の性質に較べて、それに關する學術的考察の前途のなほ遠かなるを痛切に感じたことではあるが、同時に北歐、近東等に於ける同代文物の推移に關する概念を得るにつれて、支那古銅器自體の示す實際の甚だ特異なことが意識せられて、如上の組織づけられんとしてゐる青銅器時代の性質觀に對し、新たに別な考へを容れるの餘地があるのではないかを私かに疑ふ様になつた。此の疑念は歸朝後引續き考古學上から支那古銅器の研究に従事することになり、實物の調査と其の考察とを重ね行くにつれて、いよ／＼其の感じを深くして、今や前者とは稍々違つた一の推測説を得るまでに立至つたのである。尤も上に述べた様に支那考古學の現状からして、特に問題に關する基準となる資料の不充分なことは、新たに到達したとする所のものも、固より現在に於ける一の假説の域を出でないものであり、從來の所説との間の是非に就いて、なほ自家の見解を強く主張するの自信を持たないのではあるが、一の見方としてこゝに概要を筆に上せて諸家の一察に供へることにする。其の詳細に至つては先學の叱正を俟つて更に推敲を重ねた上、據る所の資料と共に、他日別に公にしたく思ふのである。^⑥

註① 以上の圖録の外宋代にはなほ多數の關係の著録が出てゐる。其等に就いては容庚氏の「宋代吉金著錄述評」(『蔡元培先生六十五

歲慶祝論文集』下卷所掲)に解説があり、文の初には宋以前の銅器に對する觀方をも記してある。

② 濱田教授『東亞文明の黎明』昭和五年刊、東京。は其の組織立つた最初の述作である。

③ 『安陽發掘報告』(國立中央研究院歷史語言研究所專刊第一期)第四期參照。なほ此の殷墟の一斑を記した簡便な記述に『Perceval Yektis; The Shang-Yin Dynasty and the Anyang Finds (Jour. Roy. Asiatic Society, July, 1933)』がある。

④ 道野鶴松氏「古代支那に於ける純銅器時代存在に就いての確認」、『人類學雜誌』第四十七卷第六號(同上追報)同誌第四十八卷第一號)等。

⑤ 『史學雜誌』第四十三卷第八號彙報欄所載、原田淑人氏「漢以前の文化」參照。

⑥ 本論文は昨年五月考古學會の總會で試みた筆者の講演と略ぼ内容を等しくするものである。『考古學雜誌』第二十三卷第六號に掲げられた右の講演の概要の不備を併せてこれで補ふことにしたい。

二

こゝに青銅器時代と云ふのは廣く西歐に於ける史前文化發達の段階の一稱呼として用ゐられてゐる Iron Age なる言葉の譯語であつて、其の言葉の持つ内容は、人類が日常生活に必要な利器として、

古く石器を用ひたものを、偶然の機縁で純銅の存在を知り、更にそれに錫を加へることに依つて、青銅なるより堅い質料の合金となる知識を得て、これを以て利器を作つた文化の時期を指すものに外ならぬ。従つて其の意味での一つの國乃至地方の青銅器時代の調査研究を新たに試みるとする際には、先づ以て利器の性質如何が考察の重要な對象の一となる可きであつて、それが究められることに依つて、自餘の地域との比較研究の材料が出来、廣い見地からする其の國乃至地方の同代文化の占める位置が推されるわけである。處が支那の場合にあつては、資料の關係から來たことではあらうが、ミュ

ンスタールベルヒの著書以下それとは全く別な銅製の容器を取つて、直ちに青銅器時代の存在を立證せんとする傾がある。なる程古銅器は初にも記した様に、支那上代の遺物としては最も顯著なものであり、其の器形なり裝飾の圖紋の上に著しい特色を示し、また鑄造の巧緻は他に殆んど類例を見ない程であるから、それを以て古代支那の特殊な文化所産として、當代の鑄銅技術の異常な發展を徵證することには固より異論を挿むべき餘地はない。さり乍ら是等の銅器は他面に於いて一部に日常の容器である土器等との連系を辿り得るものもあるが、概言すると寧ろ特殊な形態をした非實際的な器形が多くて、既に常用の器たるの域を脱してゐる。従つて器の持つ考古學上の性質を究めまた如何なる利器が共存するかを確めることがなくては、それを一般に用ひてゐる文化段階としての青銅器時代の所産とは速斷し難い點がある。

今これを史前考古學の調査が行届いて、古代文化推移の略ぼ確められてゐる歐洲乃至近東等に於ける遺物の示す實際に觀るに、所に依つて實年代並に繼續の期間が區々であり、また遺物にもそれぞれに特徴のあるものを含むが上に、或地方では特殊な發達過程を示してゐるが、而も通じて其の青銅器時代を明確に示現する處の銅製品は、利器類を首としてゐて、それを除くと上半では裝飾品が稍々目立つ位のものであり、孰れに於いても利器の形式に石器からの系統を引いて發展した迹が明に認められるのであつて、其のこれなきものは、他から進んだ文化所産を傳へたものである。而して青銅器

時代の盛期に入り、或は鐵利器出現の時代に達して銅が利器以外の種々な器物の質料として用ゐられてゐることは著しい事實とする。彼の青銅器時代の永く續いた北歐瑞典に於いて木器から系統を引いた青銅の容器が其の第三期から表はれ始めたことは、^①歐洲中部の史前の時代で銅容器をはじめとして銅製品の最も多い Hallstatt の時代、伊太利に於ける Etruscan の遺物、前者に密接な關係があると想定せられてゐる高加索の Koban 地方の鐵器時代初期の銅製品、^②更に鑄銅の上に傑出した技術を發揮した古典希臘の彫像其他各種の銅製工藝品等と共にこれを如實に示すものに外ならぬ。支那の尊彝即ち銅容器は如上の銅製品に較べると瑞典の例よりは寧ろ後の部類に加ふ可き所産と考へられるもので、且つ器に印した款識其他から推すと Hallstatt, Caucasus の鐵器時代初期の銅容器等よりも、更に進んだ内容を持つて居り、支那人が以て禮樂の器と解してゐる所に、文化史上のより、高い段階の所産であることを暗示するものがある。處が Hallstatt 以下が史前の文化段階として鐵器時代に屬することは何等疑を挿む可き餘地のないものであつて見れば、支那の場合、瑞典に於ける様な詳細な研究が試みられてゐない今日其等の點を考慮することなく、單に青銅製であると云ふのみで、それを取つて直ちに同じ意味での人類文化の發展のより古い段階たる青銅器時代を特徴づける遺物とするには、自ら疑念を生ぜざるを得ないのである。私の支那青銅器時代に就いての考察は實に此の疑問から出發して、出來得べくば新たに其の大系を組立てんことに希望を懸けた。而してそれが手段として先づ從來閉却せら

れた青銅利器の檢出に意を用ひて、其の特質如何を確めると共に、他方また考古學上の見地から古銅器の考査を新にして、其の古代文化發達上に占めてゐる位置を推すことに重點を置いたのである。而して多數の尊彝の外、近時やうやく銅利器に對する一部識者の注意の加はるにつれて、現はれ始めた其の實物に對する觀察から、現在有する所の資料のなほ頗る不充分であるにもかゝはらず、種々の方面から興味ある示唆を得て、今や右の觀點に立つて支那の青銅器時代に對し一の假説を描くまでになつた。以下項を改めて先づ利器から之を説くことにしよう。

註① Oscar Montelius; *Swedish Antiquities* (Stockholm, 1920) 及同博士著濱田博士譯『考古學研究法』(昭和七年刊、東京)參照。

② ハルスタット、エトルスキ等の遺物に就いては廣く世に知られて、こゝに一々其の據る所を擧げるまでもない。高加索の遺物は E. Chantre; *Recherches Anthropologiques dans le Caucase* (Paris et Lyon, 1885—87) 等を見よ。

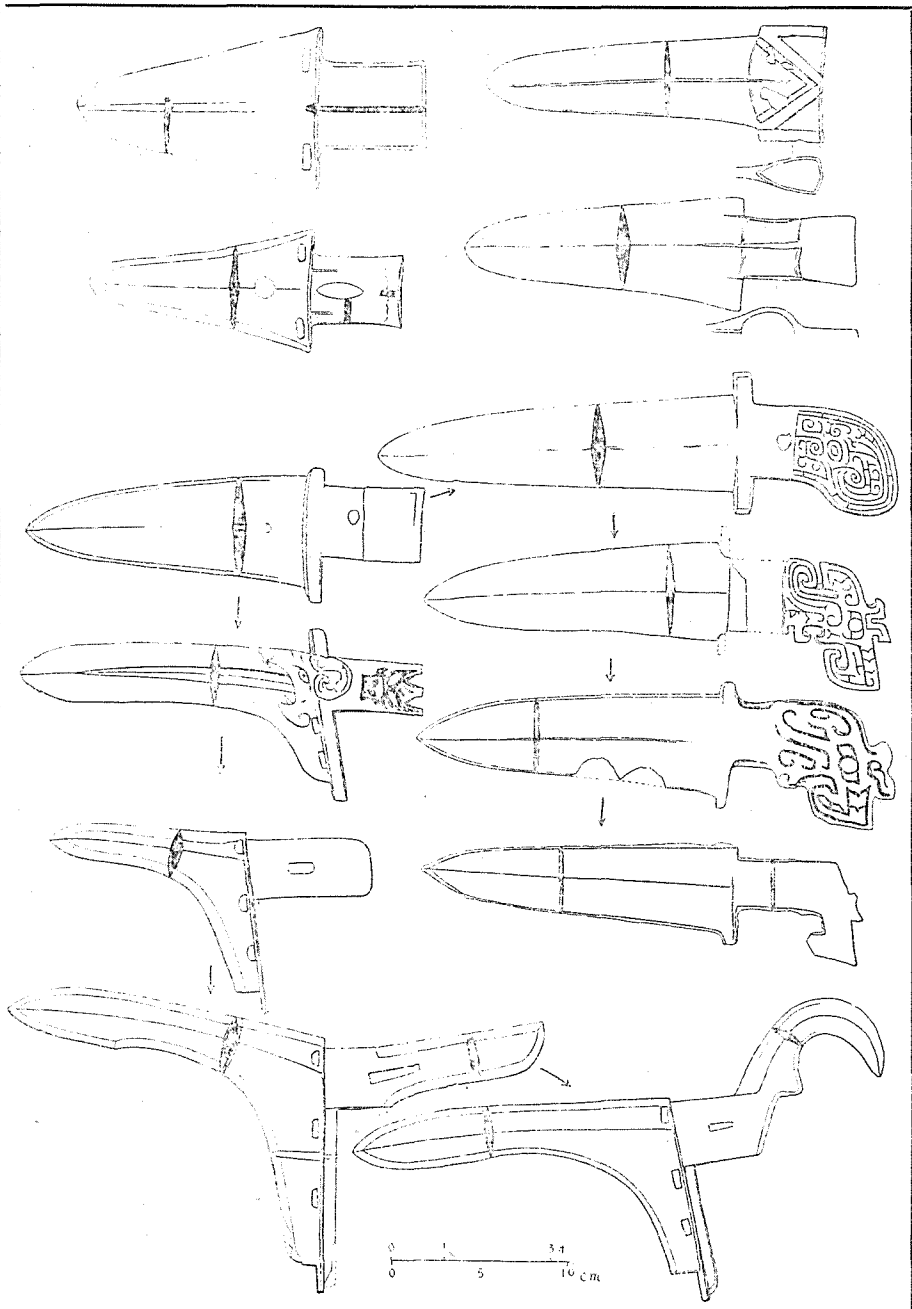
三

さて支那に於ける古代の銅利器の類は、現在では尊彝に較べて遺品がなほ乏しい。これは其國に於ける文字の愛重から、宋代以降遺物の蒐集が主として銘辭のあるものに限ると云ふ風潮に災されて、從來其の類が顧みられなかつた爲であり、また近年海外に於いて支那古美術の蒐集の行はれる様になつてからも、それがもとく異國の文物に對する好奇心から發した結果として、形の珍らしいものや、圖紋の異なる類が喜ばれて、銅製品にあつてはやはり尊彝が重せられ、利器の如きは形の特種なもの

乃至繁縟な圖紋のある遺品のみに限られたにも因るのである。従つて鍬の考古學の發達せない今日では、其の性質を論證するに據所となる様な資料は太だ得難い。さり乍ら私の數年間に互つて特に意を用ひて各地から集め得た處の漢以前と認むべき遺品——此の年代の想定は朝鮮・南滿洲等に於ける確實な漢代の遺品との比較から導いたもの——を通觀すると、中に鍬、斧斤、矛、劍、戈等を存して、其の種類が多様であるのみならず、また著しい特性を示す形式をも含んでゐることが認められて來るのである。^①

是等のうち、多くの國の場合に銅利器の中核をなしてゐる通有の銅斧の類は、支那に於ける現在の資料の示すところでは、袋のある類に限られてゐて、其の或物は時代が漢に近く、鐵斧との並行を想定せしめるものであり、此の形式に到達するより、古式な遺品はなほ殆んど見受けられないが、他方銅製の鍬の豊富な存在は、古代世界を通じて稀に觀る所であつて、現在の多くの遺品は同じく漢代に屬し、明に鐵器時代の所産であることを示すも、同時に傳殷墟出土例の如く、骨鍬、磨石鍬等との連系の考へられる遺品をも含んで居り、また矛に於いて、鋒の幅が廣く、其の袋穂の端に近く、環を飾つた發達した類を存して、英國等に於ける最も發達した銅鋒と相似を示すと共に支那的な特徴の認められることなど、研究上の注意と興味とを惹くものがある。さり乍ら支那の銅利器中是等に較べて一層特色の著しい類をなすものは、蓋し斧の一形式たる戚と所謂戈との二者であらう。

此の戈は戟と共に先秦の兵器として古くから文獻に現はれまた實物も遺存してゐて、それが宋代の黄伯思の^②研究に端を發し、清朝の程瑤田の精密な考證に據つて、一種の勾兵の器であることが明にせられた。即ち其の特色ある形に於いて「援」(身)の一方が長く横に延びて「胡」をなし、柄は此の胡に沿ふて「内」を通じ「援」と直角に着裝した點に勾兵たる *Halberd* のうちで最も發達した形式を示し、其の複雑なるものは「内」端にも刃を附して居り、此の如きは他に全く類例を見ないものである。處が右の通有の戈に對して近時續出する銅利器中には、同じ勾兵であつて而も形式學上右の類の先行と認む可き古式の遺品がまた少くなく、時には兩者の中間形式をも存し、なほ戈が戰國末まで利器として行はれた形迹のあるのに較べて、^④傳殷墟の出土品等の實際から其の類が年代に於いて古く遡る様に思はれる點は、自ら戈なる利器の支那に於けるながい發展を認める考案を導くことになつて來る。尤も吾々の有する資料は殆んど全部が游離した遺物である爲に、右の發達の系統觀を、遺跡乃至他の遺物との相關係よりする、より、確實に基礎附けることは之を將來に期する外ないのであるが、形の上からでは其の推移の順序として大體第一圖に示す様なものが得られて、其の間に大なる「ギャップ」がなく、なほ此の主な系統から離れて、比較的古い形式から、其の「内」の著しく裝飾化せられて、實用の利器より遠ざかり、更に便化して遂に一種の假器となつた一群の形式の存在がまた注意せられるのであつて、而も所謂殷墟出土品に、古式の實用品と共に、此の後者の類の少くないことが、^⑤發達した戈の後まで行



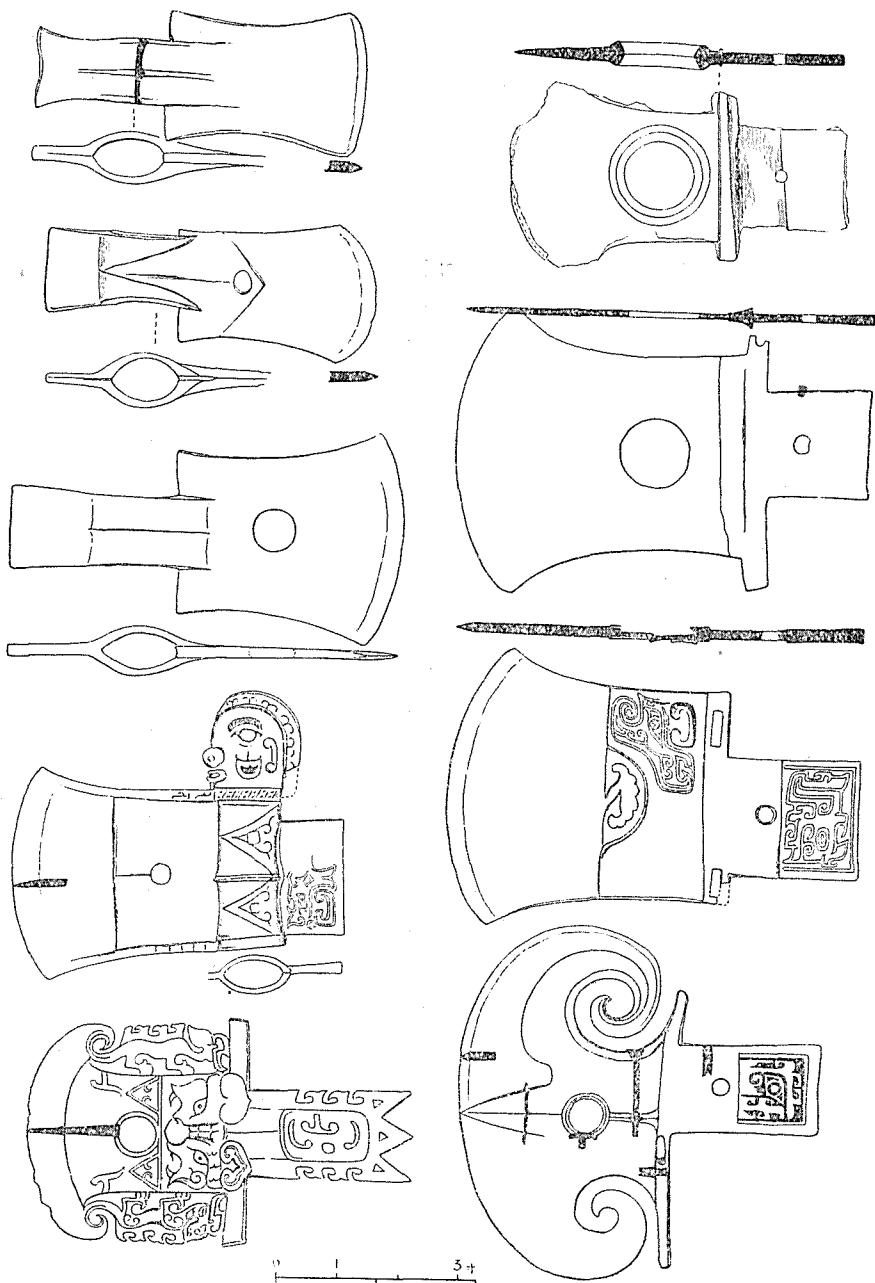
支那の青銅器時代に就いて

第十九卷 第三號 五二九

はれた事實と共に、若し是等を以て殷代の遺品に比定し得るとすれば、それは當然研究者の關心を高める事象であらねばならぬ。

次に戚も亦た一種の「内」を有して、其の刃に直角に柄を着装する點に於いて戈と共通の特徴を持つ利器であるが、其の主要部の外形は明に斧頭の系統に屬し、體の扁平にして、中央に圓孔を開いたものゝ多い點に別個な趣を呈するものがある。現存遺品中には此の形式の單簡な類で、實用の利器にふさはしいものも固より存してはゐるが、蒐集家の間に特に喜ばれて現在實例の多いのは、其の上に複雑なる裝飾紋を加へた一種の威儀の器乃至「内」の一部に古拙な銘辭の存する遺品であつて、是等を併せ觀ると、こゝにまた裝飾紋の有無に依り、兼て其の圖紋の繁簡の度からした一の形式順列が組立てられることになる(第二圖)。而して此の場合其の最も複雑な裝飾紋に於いて、三代古銅器紋を表徴する饗餮乃至虺龍紋の好例を見出す點は、近時其の類が所謂殷墟の出土として將來せられることゝ共に注意を惹くのである。

今右の二類の示すところを以て廣く古代世界の銅利器に比較して見ると、前者の系統たる halberd は、短劍と共に所謂石槍から導かれた一の形式として、愛蘭の青銅器時代の初期に稍々顯著な遺品の存するのをはじめ、西班牙、北歐の一部、多島海^①の青銅器時代等に實例を見出し得るが、孰れの地方でも、それ等は後に専ら刺兵たる短劍となつて、勾兵として上記の様な特色ある發達をなしてはゐな



支那の青銅器時代に就いて

第十九卷 第三號

五三一

い。これに較べると威は其の形からして西人の所謂 Plain blade axe の中に入る可きもので、古式の同形で同じ着装の遺品は、古代埃及に其の最も顯著な實例が認められるのみならず、外形の上に違ひはあ
るが、刃と直角に柄を袋に挿入する相似た着装の銅斧類は、所謂 *Double axe* に系統を引いて、近東の各
地に特に濃厚な分布を示し、北歐にあつても亦同系統の遺品を見受ける。かのミノアン文明を特色づ
ける *double axe* の如き、其のうちに加ふべきものとする。併し支那の威の一群は、其等の中にあつ
て、柄の着装に當り所謂 *袋* (袋) の外に、斧に所謂「内」の加はつたものを存して、其の上に一の異色
を示し、更に身の中央に圓孔を開く點に於いて、他に全く類例がない。こゝで中央に圓孔のある支那
史前の石器中で特色ある形と認められる有孔石斧が、考慮に上つて來て、銅製威の祖型が、既に先人
の指摘した玉器の斧と共に、此の有孔石斧にありとする考案が得られるわけである。果して然らば現
在支那の銅利器に著しい二類は共に尊彝の場合と同じく、古代の青銅器の中で特徴を持つてゐること
になるのである。

註① 此の支那の古代の銅利器に關しては、前年「支那古代の銅利器に就いて」なる稍々詳しい記述を『東方學報』京都第二冊に掲げた
ことがあるから、こゝでは務めて簡略にした。此の文中前説と異なる所は、其の後得た資料で前説を補足したものである。

② 黄伯思『東觀餘論』中の「銅戈辨」參照。

③ 程瑤田『通藝錄』所載「冶氏爲戈戟考」參照。

④ 朝鮮の大同江面にある古の樂浪郡の古墳分布地帯から出た秦始皇二十六年度の銘ある遺品の如きは其の好例をなすものである。

これは銅戈として最も發達した形式を示し、「内」端にも刃を著けて一部支那學者の言ふ戟に相當つてゐる。但し漢代に入つて銅戈の廢れたことは、同じ古墳地帯から此の一例以外遺品を見ない點からまた認められるのである。

⑤ 李濟博士「俯身葬」『安陽發掘報告』第三期所掲、等。

⑥ V. Gordon Childe: *The Dawn of European Civilization* (London, 1925), George Coffey: *The Bronze Age in Ireland* (Dublin, 1913), Nils Aberg: *La civilization archaïque dans la Péninsule Ibérique* (Upsala, 1921), Oscar Montelius: *Die Chronologie der ältesten Bronzezeit in Nord-Deutschland und Skandinavien* (Braunschweig, 1900), 等。

⑦ Sir W. M. Flinders Petrie: *Tools and Weapons* (London, 1917).

⑧ 林泰輔博士「支那上代の石器玉器より見た漢民族」『史學雜誌』第三十篇第七・第八兩號)、濱田博士「支那古玉概説」『有竹齋古玉譜』所收)同「威壁考附瑣瑣」(小川博士「選曆記念』史學地理學論叢』所掲、等。(以下闕出)